

パネルディスカッション

司 会：富田和気夫

パネラー：北垣聰一郎・北野博司・木越隆三（講演順）

富田：皆さま2日間にわたって本当にお疲れ様です。今回発表された方は昨日から数えまして11名いらっしゃいます。いずれの発表もすごく濃密で、刺激的な内容がずっと続いたので、皆さまきっとお疲れなんじゃないかなと思います。あと1時間ぐらい2日間のまとめを行い、シンポジウムを閉じたいと思います。もうしばらくお付き合いください。それでは、シンポジウムの方に入っていきます。

今回のパネルディスカッションはタイトル通り「城郭石垣の技術と組織からみた金沢城」ということでございます。技術ということ、組織ということ、この2つに光をあて、金沢城の石垣の特徴を浮かびあがらせることが、今回のシンポジウムの一番の狙いだったわけです。その関係で特に天下普請の城である名古屋城とか大坂城ですね、そのあたりを対象に技術と組織の問題を考えることで、前田家あるいは金沢城の特徴というものははっきりさせようという意図をもっております。

さて昨日の滝川報告では前田家の石垣技術の特徴について、他城と比較したうえでどのような点に特徴があるかという報告がありました。いくつか比較の視点も示していたと思います。お手元の資料をもう一度見ていただきますと、7ページの2のところに比較の視点を3つ、滝川さんがあげています。1つは隅角部が切石に、端正になっていること、もう1つは角ではない部分が平面じゃない、デコボコしているということ。それから3つめは石の積み方というのが乱積み傾向といいますか、きれいに整然と積み重ねる形じゃない傾向をずっと持ち続けることでした。この3つがポイントではないかというのが、彼の提案だったと思います。その辺から話を少し深めていきたいと思います。最初に石の積み方にみられる金沢城の特徴について具体的に確認していきたいと思いますが、これは昨日の北垣先生のご講演の中で、日本の石垣の石の積み方には4つのタイプあるということを指摘していただいたかと思います。繰り返しにはなりますが大事なところなので、もう一度この点再確認していただけますでしょうか。

北垣：昨日は4つの積み方について解説しましたが、今日のいくつかの報告を聞いておりましても、大体そういう組み合わせの理解でよいかなと思っております。例えば一つ申しますと「布目積み」というのは字のごとく、布の反物をこう平坦に敷き並べるということなので、そういう状態は横目地を通した積み方といえます。これを布目積みだにご理解いただけたらよいと思います。2段目も3段目も石材の厚さといいますか高さが揃っている、そういう状態で順々にあがっていきますと、それが大坂城の完成された時期の布目積みになる。こういうことですね。

それから2つ目は乱積みですが、これは要するに石材の大きさがそれぞれ異なったものを並べていくわけですね。ですから布目積みのように、横目地を通したところに置きましても、石の長さ高さが全部違うわけですから、頭はガタガタになりますね。その上に、次に乗せる石材の長軸を斜めに置いたりしていきますと、石材の配置は自由で開放的となり乱れてくる。つまり乱れた積み方、乱積み。こういうことではないでしょうか。

3つ目は布積み崩しです。さきほど布目積みということを申しましたが、こちらは横目地が少しだ

け通るものです。数石は横目地が通りますが次に大きな石や小さな石が来ると、厚さが異なるものですから、当然そこで横目地が切れてしまう。ですから短い横目地が途切れ途切れに石垣全体に見える。こういうものを布積み崩しといいます。昔の人はよく言ったもので、「崩し」という言葉で非常に多様な状況が窺える。

4つ目は落とし積みですが、これは乱積みとは異なり、石の長軸を45度にきちんと傾け規則的に配列するものです。落とし積みというのは、場合によっては乱積みにもなってしまいます。観察する人によって見方が異なるかもしれませんが、サイズが均一に決まっているような石材を明確に1つ1つ斜めに積んだもの、大体45度の角度で上まで同じように斜めに積んでいくものを普通は落とし積みといいます。ところが、使う石材のサイズが大小異なってきますと落とし積みといえなくなります。一体それは何なのか、それが乱積みです。こういうようなことですね。

富田：ありがとうございます。石積みにも基本は4つの分類があるということが、昨日・今日の遺構班の報告の基本になっていたと思います。この4つの積み方というのは、歴史的にどう考えたらいいいのでしょうか。どういう意味を持つ違いなのでしょう。

北垣：宮里さんが東国の事例をもとに報告した中で紹介された写真、これらはいずれも恐らく戦国とか天正年間という古い時期の石垣じゃないかと思いますね。あの積み方は恐らく「乱積み」というべきか、場合によったら「落とし積み」という要素が入っているかもわかりませんね。従ってかなり古い段階からそういう揃わない積み方があったのではないのでしょうか。安土城の石垣は「布積み崩し」「乱積み」がありますけど、これに隣接して戦国大名の六角氏の観音寺城がありますが、ここには天正より1つ古い弘治年間と考えられる石垣が残っています。それなんか大きな石を使いますが、どちらかというと「乱積み」ということでございます。乱積みというのは、時代が移り江戸時代になりましても、江戸後半までやはり依然として使われる。乱積み、落とし積みというのは、そういう問題がありますので、今回の問題提起はその辺りの問題を、どのように選びとって、江戸期の特徴とみていくのか、非常に難しいですけど、今日は大変面白い問題提起を拝聴できたと思っております。

富田：ありがとうございました。出現の時期は乱積みがどうも一番古くからありそうだけれども、その他のものも、その後登場しながら江戸時代を通して一応併存していたという指摘でございました。4つの基本様式それぞれ出現の時期は違うけれども、併存しているという話だったと思います。北野先生から別な観点からのコメントがあれば、お願いしたいと思います。

北野：4つの積み方というのは、時代的に主体となるものが変遷するので、論点を整理しないと難しい。昨日報告したのは、新しいものが技術が高く、古いものが劣ったものだと考えがちなのですが、見方を変えると、「乱積み」あるいは「布積み崩し」というのは、形の揃わない自然石をものすごく高い技能で積み上げたという、技術面では非常に優れた面があるわけです。それに対し切石化し石の形が揃っていくと布積みというものになっていく。個別の石材加工の技術と石積み技術というのは、非常によく対応しています。天下普請なんかではきちんとした規格材が必要なので、一定の寸法に最初から石を伐って、布積みになっていく。それが道理なのですね。だから自然石を乱積みにするというのは、個々の石材作りの部分では早くできるわけです。山から石をそのまま採ってくればいいわけです。石を確保するまでは早いけども、現場で石垣を積む段階ですごく高い技能・技術が要求される。それに対し布積みになっているような普請場では、規格的な石材を採取するときは、山で石を伐って鑿を加えてかなり規格的なものを作る。そこではものすごく手間がかかる。しかし、普請丁場ではそれほど高い熟練技能がなくても、速いスピードで積んでいける。そういう側面も併せて考えなければいけないと思います。

富田：ありがとうございます。そこで、もう1つ追加で質問したいのですが。大坂城の1期の頃の前田家丁場は、他の大名の丁場に比べて整然とした感じに欠ける、こういう指摘なのですが、積み方からすれば乱積みの傾向が強いという話が滝川さんから昨日提起されました。この辺りの問題はどうか考えればよいでしょうか。

北野：元和6年の頃というのは、他大名でも「乱積み」傾向の場所が、細川家初めたくさん確認されていました。金沢城にも「乱積み」石垣があります。これは、金沢にいた穴太たちが持っていた個性を大坂城で体现したといえます。だから技術的に低いとか高いとかの意味ではなくて、加工度の低い自然な石材を乱積みでうまく積みあげていく技術が、大坂城で体现されていったということになると思います。ただこういう一面的な見方だけでなく、大坂城1期というのは、各藩の個性がそのまま体现されるような段階であった、そういう視点も必要だと思います。2期・3期はそういう点で、個性がだんだんなくなっていく部分があるのではないかと思います。

富田：ありがとうございます。2期、3期でどんなふうに個性を発揮する状況が失われていくのか、この辺りはこの後また、お話を聞いていきたいと思っています。そこで前田家の特徴でもう一つ、滝川さんが指摘された隅角の石が早い段階で規格的な石材に変わっていく点、しかも丁寧に加工された切石に変わっていくという特徴についても意見を窺いたいと思います。他の大名と比較しても、前田家でそういう特徴を持つのは早いということでしたが、このことも重要な前田の石垣の特徴だと思いますが、北垣先生、石垣の隅角というのは、石垣全体の中で重要な場所だと、これまでの報告の中で何度も指摘されていましたが、どういう観点から重要だということになるのでしょうか。少し基本的な視点から補足していただければと思います。

北垣：隅角の部分というのは石垣全体の力がそこに集中する、そういう部分なんですね。ですから、天下普請でA・Bそれぞれの大名の工程が少しずつズレてくる、石材が届くのが少し遅れるなどの理由で工期がズレると、隅角を積み上げることができず、工事全体が停滞し遅れてしまう、そういう重要な箇所です。つまり、隅角が一番最初に積めないと石垣はできない、仕事にならない。そういう所でありまして、角石を組み合わせ、算木を作る場所なのですね。とくに大坂城のような高さ30メートル近いという高石垣を積むには、算木に積む隅角部では非常に安定した組み方をしないと、つまり角石・角脇石をしっかりと積まないと高い石垣はできない。ところが、大坂城では見事な高石垣を積み上げているわけですので、それは1つの到達点といえますね。

石垣の上に建物を乗せるということもとても大切なことなのですが、石垣の天端部分と建物を乗せる部分の取り合いも非常に大変だということもあります。そのため穴太と大工がいろいろな調整を行ったという史料もたくさんあるわけですね。そういう役割が隅角部にはあるということではないでしょうか。

富田：ありがとうございます。最近玉泉院丸の庭園跡の調査を進めておりますが、その関連調査ということで、いろいろな庭園遺構を見たり、庭園史専門の先生方とお話をする、庭の石組みというのは変化に富むことが大事であるとよくご指摘を受けます。石垣でいえば、角があることでかなり変化が出ているような気がしますが、そういう隅角のもつ外観上の意義というか、人目につく場所の石垣のデザインはどうであったかという観点から、隅角を何か評価できないでしょうか。北野先生どうでしょうか。

北野：北垣先生の説明は、技術的な面から石垣構築の上で隅角の重要性をご説明されたわけですが、いま富田さんが指摘した石垣の象徴的な側面というのは、モノには必ず存在します。特に石垣の場合は隅角が一番重要ですがけれども、築石についても「面の象徴性」というのを持っています。一番目立

つということでは隅ですね。今日の発表の中では白峰先生に加藤清正が隅角にこだわり、「大角石」という概念、言葉を使っており、実際に尾張の名古屋城や大坂城1期普請で肥後加藤家が担当した西大手門付近に大きな角石を象徴的に使っています。楠さんの発表でも、藤堂家は非常に長い角石を使うことを指摘していました。このように石垣の象徴性の中でも、やはり隅角は一番重要な場所として、各大名が気をつけた所だろうと思います。

富田：ありがとうございます。木越さんの方に質問を振りたいと思います。石垣のなかでも象徴的な存在である隅角への特別な思いというのは、文献の記録の方にも登場してきたりするのでしょうか。大坂城の丁場を割当てるときに、そうした配慮はなかったのでしょうか。

木越：そういう例は、元和6年の大坂城1期普請のとき、「晴れがましい丁場」として隅角、出隅を作る角の石垣作りを有力な西国大名が競って担当しようとしたことが、すでに指摘されています。大坂城で言いますと、西大手門（現在の大手門）の向かって左手（西側）に豪快な出隅が見えますが、福岡城の黒田家、小倉城の細川家、あるいは柳川の田中忠政であるとか、石垣巧者とよばれる西国大名が競って、こうした目立つ場所は「晴れがましい普請場」だといって幕府に工事担当を願い出た、そういうことを記述した細川家の書状などが残っています。それはある面、政治的にも重要な意味をもっていたわけですが、技術的な面でも作業上の面でも、お二方がおっしゃるように極めて重要な役割を負った所だと思っています。

富田：ありがとうございます。そうすると隅角というのは、技術的にも象徴的にもすごく重要なところであって、前田家はそういう隅角で一生懸命力を入れて石垣を作る一方で、そうじゃない場所では、自分たちの持っている技術で大坂城の公儀普請に参加した。そんな理解ができるのでしょうか。木越さんいかがでしょう。

木越：おおむね、そう考えてよいと思います。

富田：北野先生お願いします。

北野：前田家が担当した隅角が大坂城の1期で早くも切石化し、それが前田家の特徴だと指摘されていましたが、もう1つ注目してほしいのは、前田家に後藤家など「非坂本系」の穴太がいて、切石技術が発達していったという可能性にも注意したいと思います。というのは元和・寛永期にたくさんの穴太を前田家は召し抱えますが、その中に坂本穴太ではない石工が含まれていました。石積み専門ではない石工を加工石工といいますが、北垣先生が昔から、それが金沢の石垣の特徴だと指摘されていますけれども、そういう加工石工の動員というものがひょっとしたら、この時期、算木積みの隅角部を中心に、他に先行して始まった可能性はないのか。それは今後は是非検討していただきたいと思っていますところですよ。

富田：加工石工の問題では、北垣先生は以前から二十人石切という名前の職制の技能者たちに、盛んに注目していらっしゃいました。この二十人石切という身分の石工の登場というのはどうなのでしょう。こういう天下普請への参画ということと関連はあるのでしょうか。これは木越先生に聞けばいいのでしょうか。

木越：二十人石切というものが明確な形で登場するのは、元和・寛永期より、もう少し時期的には下がるのですが、それは史料で確認されないというだけで、すでに存在したかもしれません。北野さんが今おっしゃった隅角が切石になっていくという動向に加工石工が関係していたという指摘については、昨日の私の報告の中で、ちょっと紹介したのですが、時間がなく端折った所もあります。補足しておけば、江戸城の普請に関わった石工のなかに、相模小田原の石工、青木家というのがいるのですが、この青木家はもともと戦国時代から後北条氏に仕え、どちらかというと石垣というよりも土蔵で

あるとか建物の壁面や土台に使う石を細工する、まさしく北垣先生のいう細工石工だったと思います。彼はですね、後北条氏が滅びた後、あるとき家康に青木家の石加工技術が目にとまって、家康から江戸城の仕事場に来いと言われたそうです。そういうことを青木家の由緒書に書いていますが、いよいよ本格的に石垣作りに参画したのは元和の江戸城普請の頃なんですね。元和3年頃ですか、幕府老中などから青木家に切石を1万個調達するよう要請したなかで、江戸城普請は今後いよいよ「切石がはやる」、「今は切石御普請」はないけれど早晚盛んになるので値段などの才覚が肝要といい、今後の協力を要請しています。石垣の裏側の雁木階段の石なんかも切石なので、そういうものも含めてですね、門台で使う切石や隅角で使う切石などが増えてくるので、切石を使う石垣づくりに青木家の活躍が期待されています。江戸城の石垣普請では多分、元和までは割石を高く積む技術が中心であり、西日本の石工や穴太が活躍していたのだと思いますが、切石を得意とする青木家のような職人が、元和の江戸城づくりから表にたって参画してくるということは大坂城で起きた動向（隅角の切石化）と関係があると思います。そうすると坂本穴太以外の細工石工、各地で切石を得意とする、五輪塔をつくったり墓石を切ったり、いろんな石塔を作っていた石工たちが全国にいますので、彼らにとって城の石垣で切石も使うということになれば、そういう石工たちにとっても新しい仕事場ができてきたと、可能性を感じたように思います。

富田：切石の担い手の問題は、これからも追求しないといけないと思います。北陸では越前、福井県では古墳時代からですが石の加工が大変盛んなところですね。石川県はその隣にあって、そういうところと技術交流をどんなふうに行ったのか、職人の移動があったのかとかですね、そんなことも検討しなければいけないと思います。それらについては、このぐらいにしたいと思います。

ところで滝川さんの報告にあった前田家の技術の特徴、隅角の特徴あるいは隅角ではない部分の積み方の特徴というようなことは、単純に技術の先進性を基準に述べたわけではありません。つまり技の上手・下手という評価でまとめたわけではないということを確認したい。それが私どものここまでの議論の重要なポイントであります。滝川さんの報告では、あくまでそういう技術の上手・下手という意味で評価したのではなく、大坂城の最終段階に斉一化あるいは均質化が進むという方向性があり、その流れにいち早く乗ったか乗らなかったのか、そういう視点からの「先進性」という指摘だったと思いますので、そのあたりはここできちんと確認し、次に進んでまいりたいと思います。

今回のシンポジウムでは、天下普請の大坂城というものをクローズアップして取り上げ、そこでの石垣づくりの組織のあり方にも注目して話を進めてきたわけですが、特に木越さんの報告が真正面からそのことを取り上げたものだったと思います。そこで全国の大名がいくつかの組に編成されて大坂城の石垣づくりを行ったという指摘がありました。昨日の報告では時間もなくて十分にお話しできなかったかと思いますが、そのあたりの補足を含め、どういう狙いで大名組の編成が行われていたのか、ご説明いただければと思います。

木越：昨日は時間が押しており駆け足で説明したところですが、皆さんの手元のパンフレットで言いますと21ページの一覧表あるいは18ページに少しまとめて書いてあります。まず21ページの64人の大名の一覧表、これはかなりきちんと調べてまとめた一覧ですから、皆さん座右に置かれると面白い資料だと思います。どうぞご活用ください。この64大名の一覧表についてもう少し補足すれば、まず1期の元和6年の普請では64人全部じゃなくて64人中47名が参加しています。2期では59名、3期では55名参加しています。1期・2期・3期の3回とも参加した大名もあれば、1期だけで終わったとか、3期だけだったとか、そういう大名もありました。大まかに言えば、2期・3期は参加大名の顔ぶれは似ています。1期だけかなり顔ぶれが異なっていた面があります。大名の取りつぶしなどがあって変化

しました。

この表の縦欄の3番目に「大坂城出役状況」と書いたところで、全く空白になっている大名は3回とも参加した大名です。その中で、前田家は119万石のうち100万石を課税基準にして仕事をやれと言われています。3期の普請では、知行50万石の大名で50万石分の負担をせよと言われる場合もありますし、その半分の25万石分の負担でいいとされた大名もいます。これが役高というもので、役高は知行高にたいし本役か半役か、いずれかになっています。知行高ではなく役高が石垣工事を分担する基準でありましたから、役高を工事時期ごとに足したらですね、3期普請の場合は全部でおよそ400万石くらいなのです。全55大名の役高が400万石で、3期の石垣面積の合計は、本石垣だけで1万1千坪ありました。この1万1千坪を400で割ると、1万石あたり28坪くらいになります。前田家は400万石のうち100万石分を負担しましたから、1万1千坪の石垣の大体25%、全体の4分1にあたる2800坪の高石垣（二ノ丸南堀に南岸を構成する水敵石垣も加えると4000坪以上となる）の造営を担当したわけです。さらに前田家は、北野さんの報告によれば家臣団を8つの組に編成し前田丁場2800坪の普請を行ったということでした。この指摘はとても重要で、文献で分からなかった点に示唆を与えるものでした。さて前田家の担当した二ノ丸高石垣2800坪を8組で割れば、1組あたり350坪くらいの規模になります。この350坪というのは高石垣の立面積ですから、これを高さで割ります。大坂城二ノ丸の南面石垣の高さは18間くらいですから、それで割れば20間くらいになるわけです。つまり8つの家臣団に組編成された各単位は地口20間、高さ18間ほどの丁場を担当し、8組全部で2800坪の石垣を作り上げたわけです。

このように家臣団を組編成して有力大名の石垣丁場では工事がなされたわけですが、こういう大名を何人か組み合わせ4つの大名組を編成し、3期普請の大坂城二ノ丸南面の石垣は建設されたのです。4つの大名組の下に、各大名はまた家臣団を4つなり8つとかに割って分担組織を作り、重層的かつ組織的にこの公儀普請が行われたわけです。

実は慶長期の公儀普請に関して、ここまで組織的になされたのかどうか、その辺は明確ではありません。大坂城の2期以後とくに3期普請で、こうした組織化の動向は最も明確です。大名組、家臣の組という方法で、組織的に対処すれば恐らく大名や家臣の負担は公平に均一化できたのでしょう。大名どうしても役高を画一化させたほうが公平性を維持する意味で大事だったと思います。本役と半役に区別していましたが、区別の理由は明確になっていませんが、効率よく仕事するという意味で、何が基準になっているか明確にすることは必要だったと思います。

そして何よりも大坂城は幕府の城ですから、幕府の好み、つまり將軍秀忠の好みの石垣を非常に効率よく、しかも大名に不満を残さないように公平に作りあげるといふ点では、こういう組織の整備は非常に効果的であったと思いますし、それが大坂城3期の均質な石垣につながっていくのではないかと思います。

富田：ありがとうございました。組編成がもたらした効果ということで、効率アップと大名間の負担の公平性、そして將軍好みの城づくりを実現するためだというご指摘がありました。寄せ集めの大名で1つの城づくりの仕事をすれば、大名ごとの個性が出て、場所場所でそれぞれの特徴ある石垣ができあがるというのは当然のことだと思いますが、そういう中でこれを避け1つの統合性のある大坂城というのをつくりあげていった。そういう中で大名組の組織が大きな効果を発揮したというお話だったと思います。

参考までに会場のほうからも少しお話を聞きたいのですが、長屋さん。長屋さんは近世の軍事組織の研究もされていますけれども、大名が寄せ集まって1つのことをやるというのは、まず戦争の場が

思い浮かびます。戦場でも普請場と似たようなことが行われるのではないかと思いますのですが、戦場での大名編成と、普請場での編成のあり方はどういう関係にあったのでしょうか。

長屋：大名と戦争の関係についてですけれども、戦場でも普請場の組編成みたいなことは当然行われています。というのは、大名たちをたくさん集めて「備」という組織を作っておかないと戦争はできません。例えば戦場では家臣を先備・中備・後備という組織に編成しますが、小牧・長久手の戦いのとき、秀吉は各大名の石高を勘案し、それぞれの備がほぼ同じ石高となるよう先備・中備・後備に配属する大名を決めております。同様の例は朝鮮出兵の際にも見られます。加藤清正が率いる第1部隊、小西行長の第2部隊、その他いくつかの部隊に分かれて肥前名古屋城から出陣しましたが、加藤清正の備に何人の大名を配当するのか、小西行長の備えに何人付けるか、秀吉は熟慮して戦争の体制を作っています。つまり戦場では大名を何人か集め組を作るというのは普通に行われていました。

だから逆に言うと、戦場の組組織がまず先にあって、これをベースに普請の組編成というものができたと考えるのは妥当な評価だといえます。あとですね、逆に一大名レベルでいえば、城普請の組織が戦闘用の備に影響を与えたという例がありました。これは土佐藩山内家の例ですが、土佐藩は寛永期まで陣立や戦闘配置に関しては、自己の家臣や与力・足軽からなる部隊を率いる大身家臣と物頭たちが同格で戦場に配置されました。他方で二の備えあるいは後備に配置された中級家臣の馬廻は全て旗本備（藩主の率いる本隊）に配置されました。つまり戦場では2つのタイプの備の作り方があったといえますが、普請場に関しては、例えば公儀普請に参加したときは、家老を頭とする組が作られ、そこに馬廻や物頭・組頭といったものを家老の下に置くという形になっています。このように普請と戦闘の備の形態が違う状態はしばらく続きますが、正保期になると普請組織と同じものに切り替わり、戦闘の陣立の組織も変化します。この場合はですね、普請組の枠組が逆に戦闘の陣立組織に影響を与えたのではないかと考えています。このように相互に影響し合う事例も、少ないながら確認できます。

富田：ありがとうございます。戦場での組織に端を発して普請の組織が作られる一方で、普請の体制というものが、新しい軍事組織づくりに影響を与えるという、大変興味深いお話でした。つぎに北野先生から大坂城の普請組織について報告された中で大変興味深かったのは、遺構の分析から個別の大名、前田家や毛利家などが大名家臣をさらに組編成した実態を、大変細かくリアルに遺構の方から読み解く、そういう事例報告をいただきました。石垣作りにおける組編成というのは、大坂城という天下普請特有のものなのでしょうか。それとも、それぞれの居城でも行われていたものでしょうか。そのあたり北野先生どのようにお考えでしょうか。

北野：金沢城で組編成がどうなのかという疑問、さらに大坂城以前の江戸城だとか尾張名古屋城の公儀普請、前田家の参加した慶長期の公儀普請などでは組編成があったのかどうかという疑問と、その検証の仕方についてだと思いますけれども、金沢城の方では、滝川さんが寛永期の石垣の中に布積み傾向を示す所もあり、他方で乱積みの的なものを残す所があると指摘されました。同じ寛永期の石垣であっても、多様な石垣があるということでした。これは、場所ごとに積みを担当した集団とか組が違うという可能性を示していると言えるかもしれないと感じています。

ただし大坂城のように1つの面の中で、複数の大名が丁場を分担している状況ではないわけですね。多様な刻印が戸室山なんかにもあります。そういう石材の調達の方法も含め、金沢のような居城石垣を作るときも、家臣を組み合わせた組が編成された可能性があると思うので、それはもう少し、いろいろな面から検証して欲しいと思います。江戸城や尾張名古屋城では、皆さんと石積みを検討した限り、そういう組編成で積まれたことについて指摘はなかったし、私も認識はできなかったと記憶しています。それは違うというご意見があれば、是非言っていただければと思います。

富田：そのあたりも、大坂城の普請体制の新しい部分というか革新部分の1つと理解しておいてよろしいでしょうか。では、大坂城の話ずっと続けていますと時間が無くなりますので、この辺で区切りをつけたいと思います。

「石垣普請の技術と組織を探る」ということで2日間のシンポジウムやってまいりましたが、石垣技術の優劣と言いますかね、上手・下手と言いましょうか、あるいはそういう遺構の変化のあり方というのを歴史的にどう評価していくのか。評価するとき何を指標としていくのか、その辺に話を移していきたいと思います。北野先生の方からその点に関してお考えをお聞かせいただければと思います。変化を評価するときの指標をどの辺に持つのかということです。

北野：変化の指標については、技術的なものを中心に質問されたのだろーと思います。技術というのは、いろんな条件の中で表現されるものですね。石垣職人さんたちの考えだけで表現されるものではないし、石垣が置かれた場や役割またその社会の価値観であったりするわけです。大坂城の1期から3期の中で、急速に均質なものに平準化してゆくあり方というのは、もう皆さんが今までさんざんおっしゃったように、幕府好みのお城というような形で木越さんがおっしゃいましたし、それが石垣を作る各大名家及び技術者の中で、1つの価値として認められたので、ああいう変化の方向性を示したのかもしれない。つまり石工の技術だけで単独に浮き上がってそういう変化を志向したという見方はだめなんですね。

後の展開を念頭におけば、非常に高度な技術・技能のいる乱積みあるいは穴太積みと呼ばれるような石垣が、城づくりの表舞台から消えていくように見えます。恐らく別の所でそういう高い技能を保持していると私は信じたいのですが。だからそういう視点にたってみると、必ずしも切石化とか規格化という変化は高い水準の技能へ発展していったという見方はできないわけです。変化は変化として評価し、そうした技術変化の価値付けというのは、歴史的に見れば総合的に評価する必要があるということですね。

富田：石垣技術の変化の中味の価値づけは、総合的に行うべきだという話でございました。報告の中で木越さんは技術的なことだけでなく、石垣の変遷を3段階で理解してみてもどうかというような非常に興味深い、新しい提言をしていただきました。その辺りを少し補足するなり、今の北野先生のご意見を受けて、コメントなりをいただければと思います。

木越：変化してゆく石垣技術に優劣をつけるときの視点は何かという問題ですが、それは北野さんの指摘の通りだと思います。総合的かつ多面的な視点が必要だと思います。

今回のシンポジウムの中で、大坂城のとくに3期普請において、隅角が切石化し築石部の布積みが顕著になっていくという、明確な特徴が指摘されたのは、私も本当に驚きました。遺構の専門家ではないですが、技術変化の1つの流れが大坂城の中で明確に見られたというのは大きな収穫だったと思います。中国地方・九州、四国、そして金沢でも、そうした技術変化の流れが、具体的な事例報告を通して明確にできたのは、非常に大きな5年間の成果だと思います。徳川大坂城の石垣づくりの中での技術的な達成について、先進的なのか退化したのかという評価は別にし、1つの目指すべき範型が示され、それがその後全国に普及展開していったことを考えれば、それはそれで石垣技術あるいは近世的な石垣の姿の1つの大きな主流が出来たと評価してよいと思います。そういう主流ができていく経緯が今回、明らかにできたと思います。ただもう一方ですね、幕府の主導した公儀普請、大坂城普請の中で見られる隅の切石化あるいは平石の布積み化という流れに乗らない技術の展開、自分の居城では幕府の城と違うその地方独特の石垣のスタイルなり手法を堅持していく。そういう流れも一方にあるということも今回強く指摘されました。どちらが主流というわけではなくて、私はこれを2つとも主

流だと考えるべきではないかと感じました。

ですから、將軍の側近くにいろいろな助言できた藤堂高虎あたりが発案して生まれた、隅は切石に、平石部は布積みという幕府主導の主流の動きに対し、幕府の城ではそう対応するとしても、居城では自分流を貫くという流れもあった。各大名家独自の石垣技術に関する認識や考え方というものも、もう1つの主流として見ていくべきではないかと思います。そういう意味で、この2つの要素が絡み合ったなかで、石垣技術の3つの波もさらに内容のあるものに、複眼的な視点から深めたいと思います。

私の提起した第1番目の大きな波の到達点は、布積みに象徴されるような技術になりますが、他方で必ずしもそうじゃないものを東国でも西国でも、北陸でも残している。そういう複雑な力が、第2期の新しい要素を生み出す起爆剤になるのだと思います。布積み化する流れに逆らい、その均質化を嫌い、その地方独自のものを生み出すエネルギーにもなっていく力が、もう1つの流れとしてちゃんとあると考えたいと思います。脇役にも見える地方色豊かな石垣技術、個性ある石垣づくりの意欲、それが2期・3期にかけて、動き出すのではないかと考えます。

富田：ありがとうございます。ではそろそろまとめをする時間になってきましたが、滝川さんと石野さんに振ってもいいですか。いろんな成果があがったと木越副所長がまとめていただきましたが、これからの金沢城の課題というものも当然見えてきたようにも思います。そこで文献班・遺構班それぞれで中心メンバーとして活躍された石野さんと滝川さんに、今までの5年間で考えたこと、あるいは、これからの課題みたいなことを少し話して頂ければと思います。

石野：石野でございます。この5年間文献班としていろいろ調査のため全国まわってきたわけです。新たにわかったこともありますが、わからないことも多く、課題として残してしまったこともあります。今回、特に穴太という石垣職人に注目しましたが、江戸初期加賀の前田家では、従来の穴生だけでは技術的に心許ないということで、近江坂本の穴太頭、戸波駿河というものを寛永初期に300石で召し抱えております。非常に高い禄高ですが、その一方で、江戸中・後期には後藤家とか正木家などいろいろな穴太がいた。そういった職人たちがどのように展開していったか。元和・寛永の大坂城普請、万治の江戸城普請を経て、そして寛文・元禄と変化していくわけですが、その中でいつの間にか何家かあった近江坂本出身の穴太家が藩の記録の中から消えていきます。坂本穴太はどこへいったかわからなくなります。残ったのが奥家であり、後藤家でした。後藤家の分家に勘左衛門家という穴生家もありますが、これらの加賀藩の穴生の流れというものがどうなっていくのか、これが1つ課題のような気がします。

元禄8年のことですが加賀藩では飛騨高山城を接収に行き、取り壊しも担当し加賀藩の手で行います。公儀普請は積む方ですが、これは石垣を外して壊す方に後藤勘左衛門が出張しています。それから、もう少し時代が下りますと、後藤彦三郎のような、技術秘伝を書く人も現れます。一方で、二十人石切とか御扶持人石切という人が、これは17世紀中期ぐらいに萌芽があり、御扶持人石切の中から正木甚左衛門なる優秀な穴太も出てきます。彼らは公儀普請の経験者といいますか、その記憶を持っている気がします。それが秘伝書に結びつき、その後のあり方を決定付けたのではないかと、そう考えています。

絵図・文献班の課題としては、穴太たちの系譜をもう少し詳細に追っていくというのが、今後の課題の1つとしてあがってきたということです。

滝川：滝川です。私の話の中でも特に推論を重ねた部分ですが、やはり金沢城石垣の特徴といいますと、ずっと「石垣の博物館」だと宣伝してきたのですが、非常にバラエティに富んだ、しかもデザイ

ン性の高い石垣がありますと、その特徴を言ってきたわけですね。その多様性はとくに17世紀後半に顕著化すると指摘してきました。この多様性やデザイン性につきまして、今回は寛永段階では布積みだけでなく、乱積み系統も保持していたことと関係があるのではないかと推測しました。さきほど木越副所長もお話されましたが、公儀普請での経験ということが何らかの影響を与えているのではないかという見通しを一応立てたわけです。ただですね、やはり同時に公儀普請の経験というだけで、あのようなスタイリッシュな石垣が本当に生み出されるのかといいますと、やはりそれだけでは説明できないものがあるのではないかと考えています。そこに飛躍があるのではないか、ということも併せて感じているのが実情なのです。

研究所の事業の宣伝になるのですが、実は来年度から金沢城調査研究所では、城内あるいは城内に隣接した所にあった庭園、兼六園に代表されるような庭園、それらについて、年代や構造や機能、遺構などの相互関係について総合的な調査研究に着手しようと考えています。城内に庭園を築造することの意味、その必要性などを考えていく予定です。城内にデザイン性の高い石垣がつくられていった背景は庭園ですから、発生・形成のカギは城内庭園のどこかにやはり隠れているように思います。今回の石垣技術の発達という観点から見た側面と併せて文化的背景を考えていくことも必要だと考えています。

富田：ありがとうございます。それでは北垣先生。最後になりますけども、北垣先生に比較研究事業の総括ということで、まとめをしていただければと思います。お願いします。

北垣：昨日と今日と、大変多くの県民・市民の皆様がこの会場に足を運んでいただき感謝します。私自身も新しい勉強をさせていただきましたが、皆様と一緒に最先端の石垣技術の研究成果を学ばせていただいたことは、とても良かったと思います。そういう中で、これからの調査研究、石垣研究はどうあるべきかということについて、ちょっと私なりに思いついたことを述べたいと思います。講師の皆様からいただいたことをヒントに、すぐにでも取り組める、そういう課題から申し上げたいと思います。

今回の公儀普請に焦点をあてた石垣技術の研究では、各地の大名居城の石垣技術についての言及が十分ではなかった。地方に配置された大名個々にはそれぞれ当然独自の石垣技術があるわけですね。そういった、今回名前のあがらなかった大名居城の石垣技術、こういうものも横断的に調査していけば、さらに有効であるということが今回確認されたと思います。ですから、これまで光をあてられなかった諸大名の城郭にも目を向け、今回同様の方法を駆使し検討していく必要があるのではないかと思います。それを金沢城の方から情報発信することができる、そういう印象も今回の重厚な調査報告から感じました。公儀普請にみる石垣技術という視点で今回検討していただいたわけですが、それを今度は全国にもう一度返していく作業が必要ではないかと思うのです。

具体的な例で申しますと、石垣の反り、勾配の問題があります。金沢城の滝川さんの方から、石垣の反りの変遷について指摘がありましたが、現在のところ金沢城で一番古いといわれる文禄石垣にひょっとしたら「反り」があるのではないかという指摘がありました。こういうビックリする話があったのです。各地の事例報告では、石垣の反りは、やはり慶長年間からという話でした。文禄の反りというのはなかなかなかった。これはですね、文禄の反りかもわかりません。あるいは慶長段階のいわゆる反りの問題ですが、これはぜひとも継続して追究してほしいと思います。そのためには、勾配の断面構造をしっかりと記録することが重要です。それが改修後にできた勾配、反りなのか、そうではなく当初からの反りなのか、こういうことも含めぜひ各地の城で勾配の断面図を作っていただきたいと思っています。

韓国の倭西浦という倭城の反りについて市川さんが報告していましたので、そういうことも踏まえ、石垣の反り発生の問題を考えていくことも重要であろうといえます。金沢城の石垣の勾配を考えていく上でも非常に大きなヒントをいただいたのではないかと思います。

石垣の構築技術というのは、結局何か1つに焦点を合わせて見るだけでは、なかなかものにならないということもお分かりいただけたと思うのです。総合的に内部構造をしっかりと確認していくこと、これがこれからの金沢城の石垣技術にとって、大きな課題ではないかと思います。

例えば石切丁場での石材の調達、これは戸室山がございますから、そういうところから始まり、いわゆる普請丁場、これは金沢城内ということですね、そういう中で石垣の持っている個々の特徴をしっかりと把握し再確認していく、こういう作業が総合的な調査をしていくうえで非常に大事な基本だということを思いました。そういうことの中で、日本の近世城郭の石垣の価値というものを、更に一層解明できると思います。今日はよい機会を与えていただいた、こういうことを思います。当然それは金沢城そのものの解明ということでもあります。

それからもう一つ、昨日は私ちょっと舌足らずだったんですが、東アジアの中での金沢城ということとで大きなことを申しました。それは北野先生もおっしゃったように、近世城郭の石垣を調べていくということは、そのルーツが当然あるわけで、それを考えるべきだということです。鎌倉時代の元寇の防塁についてふれました。さらに、日本で一番古いといわれる、大宰府を中心とした朝鮮半島からの技術が入ってきたお城、古代朝鮮式山城や高麗、そのほか李朝期の^{ゆうじょう}邑城、豊臣期の^{わじょう}倭城などとの関連を考えてゆく問題もあります。いずれも立派な石垣が残っております。これは今回の公儀普請の組織のルーツを考えるうえで興味深い話題が含まれているものでございます。これは、やはり東アジア、中国・朝鮮半島そして今金沢のこの会場での近世城郭の石垣という1つの大きな流れの中で見ていくと、また新しい金沢城が見えてくるのではないかと感じております。

この2日間にわたる研究会というのは、非常に専門的と言いますか、おそらく日本の石垣研究の最先端の話題が、今日会場にお越しの県民の皆様方はお聞きになられたのだと思います。難しい話もあったかも知れませんが、日本の最先端のお話を聞いていただいたということでひとつご理解いただきたいと思います。わたしどもの研究所としましては、最先端の研究成果をできるだけわかりやすく、県民の皆様にお伝えしていくのが使命だと考えております。城郭専門の県立の調査研究所というのは日本でここしかないのです。それだけに、そういう役割を県民の皆様から頂いていると確信を持って、これまで10年間やらせてもらってきております。そういうことでこれからも、最先端の研究成果は、金沢に行けば聞くことができると、こういうような場にしたいと思っております。その点もひとつご理解を賜りたいと存じます。

最後に、今後の調査研究の成果というものは、石垣の保存にどう活用していくか、それから今の私たちの生活にどう活かしていくか、研究とは本来そういうものではなかろうかと思っています。金沢城には「石垣の博物館」、野外博物館という言葉もいただいておりますので、そういった名前に恥じない石垣遺構の管理、修理の体制を作ることも課題でございます。そういう意味で、今はたいへん重要な時期に来ているようにも思います。ちょっと手を抜けば、文化財としての価値を失うかも知れないという面もありますので、ぜひとも県民の皆様方のお力添えを賜りたいと思います。石垣を保護し保存していくための技術とか組織ということも大切なことだと思っております。そういうことを確認させていただきまして、私の今日のまとめの言葉にさせていただきます。

富田：ありがとうございます。では最後の最後ですが、私の方から一言だけお話しさせていただきます。今回の比較研究プロジェクトは客員研究員という方々をお招きして進めてきたわけですから、さきほどか

ら、ずっと客員研究員の皆さんの研究成果を報告していただきました。6名の方々には、それぞれの
本務のほうで報告書の原稿などを書きながら、金沢城の石垣技術の研究にも力を貸していただき、す
ごく大変だったと思います。客員研究員の皆さまのお力がなければ今回のシンポジウムはなかったし、
こういう成果もなかったと思います。そういう意味で大変ありがたく思うわけです。会場の皆さん、
もし、よかったら客員の6名の方々に、この場で拍手をしていただければ有り難いと思います。

(拍手) ありがとうございました。

それではパネルディスカッションの方はここで閉じたいと思います。ありがとうございました。